

語り継がれるもの その8
—パプアニューギニア・フォイの口頭伝承—
Things Handed Down Part 8 :
Oral Traditions among the Foi in Papua New Guinea

槌谷 智子
TSUCHIYA Tomoko

無文字社会であるフォイには数多くの口頭伝承があり、それを聞いたり語ったりすることは人々の楽しみであると同時に、それを通して彼らの世界観が世代から世代へと継承されていく。本論の目的は、口頭伝承を通してフォイの世界観を知ることにある。本論では、動物と関連した伝承を取り上げた。動物はしばしば霊が姿を変えたものである。異界に住む霊的存在は地上に出現することがある。フォイの世界観では、この世と異界は明確に分けられるものではなく、相互に境界を越境しうる。人間と霊的存在は、時には親和的に、時には敵対しながら交流し続けているのである。

キーワード：口頭伝承、世界観、霊、フォイ、動物

1. はじめに

本論の目的は、パプアニューギニアに暮らすフォイの口頭伝承を通してフォイの世界観を探究することにある。無文字社会であるフォイにおいては、数多くの神話や物語が口頭で伝承されている。こうした伝承は、特定の人だけが知っているものではなく、誰でも語ることができる。誰かが話し始めると、声を聞きつけた子どもも大人もどこからともなく集まってくる。抑揚をつけ、声色を変え、絶妙な間とリズム感のある語りに、誰もが惹きつけられる。時には笑い、時には怖がり、「アイー」「アジョー」と言った声が思わず漏れだし、日常と異なる世界に引き込まれる。娯楽が限られた村の生活では、伝承を聞くことは人々の楽しみであると同時に、それを通して彼らの世界観が世代から世代へと継承されていく。

フォイは、南部高地州南端の低地熱帯雨林地帯に居住する人口約5,000人のフォイ語を話す民族集団である。フォイは居住地域によって、フォイ自身によって3つの下位集団が認識されている。筆者が調査対象とするのは「低地フォイ」と呼ばれる人口約540人の集団で、ムビ川下流域の7つのコミュニティに暮らしている。

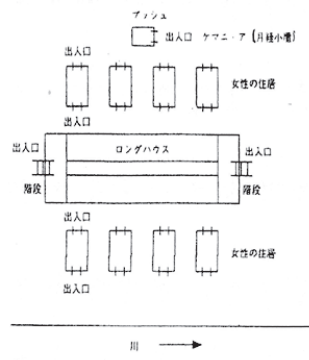
口頭伝承は、1992年から2014年にかけて断続的に実施した計30ヶ月間の現地調査で収集した。録音したものをローマ字に起こし、それをアシスタントの助けを借りて翻訳した。これまで7本の論文としてフォイの伝承を発表してきたが（槌谷2013、2014、2015、2016、2017、2018、2020）、本論はその続編にあたるものである。2013年14年15年はヘビと鳥の伝承、16年17年は父系出自集団「クラン」に関連した伝承、18年は異界と禁忌の土地にかかわる伝承を取り上げた。20年は太陽、月、星、川などの創世神話を取り上げた。本論では、動物にかかわる伝承を取り上げる。フォイの伝承では、人間が動物に変わるという結末が多い。これまでもヘビ、鳥に変わるという物語を取り上げたが、今回はさまざまな動物と関連した物語を取り上げる。

2. 民族誌的背景

2-1 衣食住と生業

川のほとりにあるコミュニティは、男性たちが共同で寝起きするロングハウスを中心にして、その両側に妻と

子供たちが暮らす複数の家屋が立つ。ロングハウスは川と並行に建てられ、川上側と川下側二か所に戸口があり、窓はない。高床式で、階段を上った戸口の前に小さなベランダがある(図参照)。内部は二つの戸口を結ぶ中央通路があり、その両側にたくさんの炉がある。一つの炉をその両側の二人が利用して、その場所でくつろぎ、眠る。中央通路は、祭礼や葬礼が行われる場である。ロングハウスには、祭礼や葬礼などの特別な場合を除いて女性は立ち入ることができない⁽¹⁾。女性が暮らす小屋も高床式で、丸太に切り込みを入れた梯子を立てかけて出入りする。出かける時には梯子をはずしておく。人々は、遠方の菜園作業や狩猟のための出作り小屋とロングハウスのある村を往来して生活している。かつては、コミュニティの規模が現在よりも小さく、一つのロングハウスの中を壁で男女の空間に仕切って暮らしていた。



〈図 ロングハウス・コミュニティ〉

女性は樹皮の内皮を叩き延ばして作る樹皮布を頭からベールのように被る。現在は布スカートをはいているが、かつては腰みのをつけていた。男性は祭礼の時には、特別の装束に着替える。木のベルトに前掛け、背中に赤い葉、腕輪、足輪、頭飾りをつける。

一年は雨季と乾季に分かれるが、一年を通して降雨量が多い。乾季は狩猟・漁撈や新しい菜園を作るのに適した時期である。フォイは農耕、狩猟採集、川での漁撈による自給自足の生活をしている。狩猟では、野生のブタ、クスクスなど各種有袋類の動物、ヘビ、コウモリ、鳥などが捕獲される。ブタやヒクイドリなど大型の獲物は、焼いた石を利用して地面で蒸し焼きにされる。内臓は竹筒に入れて焼いて食される。犬を連れての狩猟は男性のみが行うが、昆虫や小動物の捕獲は女性も行う。家畜のブタは小さいうちは女性が家で世話をするが、大きくなるとプッシュに放し飼いにする。ブタはめったに食べられないごちそうで、祭礼にブタは欠かせない。

農作業はまずプッシュの木を切り倒すのは男性の仕事で、植え付けと手入れは女性が行う。各種の青菜、キュウリ、ピットピット、各種果実などを栽培している。主食となるのは、サゴヤシから採集されるデンプンである。サゴヤシを切り倒すのは男性の仕事で、サゴヤシからデンプンを採集する一連の作業は、女性の仕事である。サ



〈写真 ロングハウス前の広場でくつろぐ女性と子ども〉
(筆者撮影)

ゴヤシの髄をハンマーで碎き、それをバスケットに入れる。ティリファ(ヤシの仏炎苞。水を通さず丈夫なのでうけに使う)の上でバスケットに水を注いで絞り、ティリファにデンプンが沈殿するのを待つ。サゴデンプンは女性が保管し、料理する。サゴデンプンは実質的にも象徴的にも女性と強い結びつきを持ち、料理したサゴデンプンを男性にあげることは結婚することを意味する。調理は大型獣を除いて、すべて竹筒に入れて炉で焼かれる。竹は鍋と皿の役割を果たすばかりでなく、水を入れておく瓶の役割も果たす。そのため、毎日たくさんの竹を切ってくる。採集した竹や作物は網袋に入れて運ばれる。赤ん坊を運ぶのにも利用される網袋は、丈夫で日常生活になくてはならない道具である。

2-2 社会組織・祭礼・信仰

フォイの社会組織の基礎は父系出自集団のクランである。各コミュニティは2～5つのクラン成員によって構

成されている。同じクランの成員同士は「兄弟・姉妹」と呼び合う関係で結婚できないため、誰がどのクランであるかは誰もが知っている。婚姻は一夫多妻制である。クランは土地を所有する単位でもある。理念的には結婚後は夫の土地に暮らし、夫のクランの土地で菜園を作り、サゴデンプンを採集し、川で漁撈を行う。

フォイには二種類の祭礼がある。歌がうたわれるものと、太鼓が演奏される祭礼である。祭礼を主催する村の人々は、招待した人々にふるまうためのブタや食べ物を十分に準備する。準備ができると祭礼の日取りが知らされ、招待されたゲストは太鼓や歌を演奏する準備や衣装の準備をする。物語では、鳥がやってきて祭礼を行う日を「フファ（14日目）」と鳴いて知らせるという記述がしばしば出てくる。当日、ゲストは村の近くの茂みで祭礼の装束に着替えて、列を成してロングハウスに入り、中央通路で夕方から夜明けまで夜を徹して演奏する。演奏するのは男性のみだが、女性も中に入って聴くことができる。太鼓は5～6人で一つのグループを作り、一列になって通路を移動しながら叩く。数グループがそれぞれに移動しながら一晩中叩き続ける。歌の祭礼では、歌詞は即興的に作られ、ある人物のことを描写する。最後に誰のことを歌っていたのか名前を明かす形式で、これは祭礼の歌だけでなく、葬礼歌や労働歌でも同じ形式で歌われる⁽²⁾。

フォイでは、人間は二種類の霊「ホー（*ho*）」を体内に持っていて、死後も霊は存在し続けると信じられている。目の中に宿るとされる霊は、死ぬ間際に身体から抜け出て、喪が明けると自分のクランの土地にある大木・洞窟・川の渦巻きへ行って暮らすと言われている。もう一つの心臓にいとされる霊は、死後川を下り死者の霊が暮らす海岸へ行くとされる。川下と西の方角は死や超自然的存在と関連付けられている。各クランの土地の中には、行くことを禁じられている土地があり、「イ（*i*）」と呼ばれている。そうした禁忌の地には、祖霊が動物に姿を変えて暮らしていると考えられている。イにはヘビ、トカゲ、アリなどがいるが、そうした動物は祖霊が姿を変えたものと信じられており、殺すことは絶対的な禁忌である。

フォイの人々は、人間だけでなく自然界のさまざまなものには霊が宿り、いろいろな場所に霊が棲んでいると信じている。イだけでなく、ごく身近に往来する場所にもさまざまな霊がいると言われる。とりわけ川の渦巻きや洞窟は霊が出現する所だと語られる。霊はしばしば人間を襲うことがあり、人々はこうした霊に遭遇することを恐れている。

3. フォイの口頭伝承

以下に6編の伝承を記述する。その際、筆者が補足した言葉は〔 〕に入れ、説明は（ ）に入れた⁽³⁾。語り手は、擬音語、感嘆語を巧みに使い、臨場感を盛り上げているが、そのまま記述すると状況や感情が伝わり難い場合には、日本の表現に置き換えた。元の擬音語・感嘆語は（ ）に入れて併記した。フォイの語り方の特徴として、何度も反復して語られる部分がある一方、話が突然飛んでしまうことがある。語りの持つ独特のリズムを尊重しつつも、繰り返しは一部省略し、補足が必要と判断した部分は〔 〕に入れて加筆した。また、話の流れが前後してわかりにくい場合には、筆者の判断で入れ替えた部分がある。話の冒頭、ニュアンスをくんで、「昔々」「あるところに」という書き出しを加えた。妻が夫に呼びかける呼称は「あなた」、夫が妻に呼びかける呼称は「おまえ」、大人が子供に呼びかける呼称は「おまえ」「ぼうず」など場面に応じて訳し分けた。しかし、修正は必要最小限にとどめ、原文にできるだけ忠実に訳すことを心掛けた。⁽⁴⁾

3-1 のみ 話者：ワブリ

昔々、おばあさんと少年が住んでいました。おばあさんは歩き回ることができないので、少年が小さな弓矢をもって山へ出かけ、バツタを射ち、別のバツタを探して射ち、また別のを射ち・・・としていると、大きなバツタがいるのを見つけたので射ちました。しかし、射ちそこなって逃げられたので、追いかけていくと、何か大きなドゥードゥーという音が聞こえました。そちらに行ってみると、大男がヒクイドリを切っていました。よく見

ると、男のペニスに少年の矢が刺さっていました。そこで、矢を抜いて帰ろうとしましたが、男が言いました。「ぼうず、帰るな。このヒクイドリの足を持って行け」。そこで、少年はそこにとどまりました。男はヒクイドリを解体すると、胃腸を切って少年にくれたので、持ち帰りました。

おばあさんと少年は竹を切ってその中に胃腸を入れて料理して、それを食べ、さあ寝ようという時に、少年はこう言いました。「おばあさん、大男が僕たちはどこに寝るのかと聞いたんだ。それで、いつもの寝床で寝ると答えたよ」。それで、おばあさんと少年は「寝床ではなく」、大きな網袋を取り出して「柱にかけて」その中に寝ました。網袋の中になると、家の下で何かを持ち上げて落とす音（梯子を落とす音）が聞こえ、大男がやってきました。彼はそーっと戸を開け、人を殺すための棒を持って、あちこち探し回りましたが、何も見つけれなかったので行ってしまいました。

二人は網袋の中で眠り、朝になり、ヒクイドリの残りなどを食べると、少年は小さな弓矢を持って、また獲物を探して歩きまわりました。再び大きなバツが止まっていたので射ちましたが、逃げたので捕まえようと追いかけていくと、大男が大きなブタを切っていました。見ると、男のペニスにはまた矢が刺さっていました。「ごめんなさい。あなたを射つつもりはなかったのです」と言う、「わかった。ぼうず、まだ帰るな。ブタの足を持っていけ」と大男は言いました。そこで待っていると、ブタの足と腸を切ってくれました。もらって帰ろうとすると男は言いました。「おばあさんとおまえはどこに寝たんだ」「僕たちは大きな網袋の中で寝ました」と答えると、「よし」と言いました。

少年は帰って、ブタを竹に入れて料理して食べ、寝る前に言いました。「おばあさん、大男が僕たちはどこに寝たのかと聞くから、大きな網袋に寝たと答えたよ。そしたら、よし、と言ったよ」。それで、2人は竹筒の中に入りました。竹の中にひそんでいると、大男がやってきて、戸を開けました。そして、大きな網袋を開けて中を見ました。「中にあった」ティリファ（サゴヤシの仏炎苞）を破り、「網袋の中を」探しましたが二人を見つけられなかったの、そこにあった竹を壊しました。二人がそこから出てきたので殺そうとしましたが、おばあさんが「エー、私たちを家の中で殺すのはよくないよ。外で殺しなさい」と言うので、二人を外に連れ出して殺そうとすると、何か小さなものが二つ飛んで行きました。のみ (tedare) が二匹飛び去りました。

3-2 オオトカゲ (モロベ) 話者：イニ

昔々、大きなロングハウスがありました。そこに多くの男たちが暮らしていました。男たちは犬を連れてブタを狩り、ヒクイドリを狩り、鳥を獲り、暮らしていました。

ある日、全員菜園に出かけて、ロングハウスには誰もいませんでした。そして、帰ってきてみると、アレツ(エゲー)、ロングハウスの戸が開いているではありませんか。中に入ってみると、寝床一面に大量の下痢便がまき散らされていました。「なんと (イーア)、いったい誰がこんなことをしたんだ」と男たちは言って、マットを川に持って行って洗い、水を汲んできて床を洗いました。男たちはひどく腹をたてました。しかし、同じことが何度も起こり、そのたびに洗いました。「どうしてこんなことが続くのか」と不思議でした。

ロングハウスにも女たちの家にも便がまき散らされるので、ある日、全員で出かけるのはやめて、一方の戸口の両側に一人ずつ少年が、反対側の戸口にも一人ずつ少年が見張ることにしました。誰が来るのか見張るために隠れていました。しばらくすると、家の下で物音がしましたが、少年たちは音をたてないようにして隠れて見えていました。何かがやってきて、バオーという音をたて、トントんと音をたてました。戸を開けたのでこっそり見ていると、そいつは大きなお腹をしていました。そして、パウーと音をたてて糞をしました。[お腹を空っぽにした後] ロングハウスにあったバム鳥、ブタの足、竹筒で焼いた甲虫の幼虫、魚など食べ物を食べに食べて、食べつくすと、川上側の戸口にやってきました。「アレ (アエー)、戸を開けたのに、しまっている」と反対の戸口へ行くとそちらも閉まっていて、「おまえがやっていたんだな！」と「少年たちに」捕まりました。「われわれは、

おまえを殺そうと、この戸口で待ち構えていたのだ」と少年たちは言って、[出かけた] 他の男たちに「オーイ、オーイ、捕まえたぞ」と大声で知らせました。「捕まえたぞ。帰ってこい！帰ってこい！」「わかった。帰る！」と男たちが帰ってきました。「さあ、こいつを殺そう。俺がこいつを殺すぞ！」とある男が言うと、「アイー、この家はきれいです。もし、ここで私を殺せば、きれいな家を血で汚してしまいます。ですから、ベランダで殺しなさい」と言いました。「いいや、だまそうとしている。ここで殺そう」と言うと、「アイー、ベランダで殺せるでしょう」と言うので、ベランダへ連れていくと、「アイー、あなた方の座るこのきれいな場所を、血で汚してしまいます。あそこ（外）で殺して下さい」と言うので、殺すために地面に下ろしました。そして、一人の男が尻を槍で刺しました。「もう充分です。これ以上刺したら、血でここを汚してしまいます。川へ連れて行って殺した方がいいのではないですか。川岸で私を殺して下さい」と言うので川岸へ連れて行き、足を捕まえて殺そうとすると、水中に飛び込んでモロベ（川辺に住むオオトカゲ）になりました。そして、川の対岸へ逃げて行きました。モロベの尻尾は刺された槍です。そして、男たちはアナ鳥、ワユ鳥、トゥム鳥に変わりました。村へ糞をしにやってきた男はモロベになりました。

3-3 羽アリ 話者：アバイ

あるところに、夫婦が住んでいました。夫は狩りをしませんでした。夫は何もせず、大きな石斧を持って、袋を脇にさげて、うろうろ歩きまわってばかりいました。夫は、妻が作ったサゴの葉のバスケット（採集したサゴデンブンを包むもの）を空で持ち帰るだけでした。妻は一人で川で魚を釣り、幼虫を採ってきて、それを食べて二人は暮らしていました。夫は何も持ち帰りませんでした。妻が採集したサゴデンブンもなくなってしまいました。それで、妻は「いったい、何をしているの？」と言うと、夫は犬の前足を縛って家に残して、出かけて行きました。妻はこっそり後をつけて行きました。夫が下りて行く方を見ると、大きな木がありました。夫は木の下に立って、木に登ろうとしていました。妻は道に隠れて見ていました。夫は大きな石斧を木に刺して、サゴデンブンを担いで木を登って行きました。夫が登っていったクバロの木を見ると、枝にたくさんのサゴデンブンが置かれていました。彼は、各枝にサゴデンブンをかけていきました。夫が刺した斧の所へ行き、「まあ（アイジェー）、あなたはいつもこんなことをしていたの？」と妻が言うと、夫は飛び降りて、羽アリ（yabea'abu 木の枝に巣を作る）に変身しました。我々が食べる羽アリです。男が置いたサゴデンブンは羽アリの巣に変わりました。

3-4 タロイモとサゴ幼虫 話者：アナグ

あるところに、一軒の大きな家がありました。一人の男と彼のたくさんの子供たちが住んでいました。ヒクイドリやブタを狩って暮らしていました。女はいませんでした。老人とたくさんの男の子たちだけで暮らしていました。男の子たちは家の中に寝ていましたが、一番下の男の子と老父の二人はベランダで寝ていました。

ある日、鳥が「14日目、14日目（fufua taro）」と[祭礼の日を]知らせに来ました。それで、祭礼の衣装を準備し、ブタなどを捕まえて狩りに行って食べ物の準備をし、太鼓を打つ練習をしました。老父は言いました。「子供たち、お前たちだけで祭に行け。一番下の弟を連れて行ってはいけない」「わかりました」と兄弟たちは出かけようとしたが、兄弟の一人がどうしても末弟を連れていきたいと何度も何度も言うので、最後に父親は「連れていけ。太鼓と衣装もあげよう。[祭を行う村で] 衣装を着ける時も、太鼓を打つ時も、決して弟を一人置いていてはいけない。一緒に連れて行きなさい。そして必ず連れて帰りなさい」と言いました。それで、末弟を連れて、皆で出かけました。父親が一人残りました。

祭礼を行う村に着きました。ロングハウスの真ん中に弟を置いて、[その周りで] 兄弟たちは列を作って太鼓を打ち始めました。太鼓を叩き、叩き、叩き続けました。一人の女が焼いたサゴデンブンの一片を末弟に投げました（求愛の合図）。女が夜明けまで何度もサゴを投げました。一晩中太鼓を叩いたので、皆は寢床に眠り、末

弟だけは中央通路の真ん中に寝ました。男たちは疲れて眠っていたので、色白の女が末弟をこっそり連れて行ったことに誰も気づきませんでした。午後目を覚ますと、弟はいなくなっていました。兄弟たちは「ワー（アウオー）、ここにいた弟がいなくなりました。お父さんが「一人にしてはいけない」と言っていたのに」と言って、山の下、山の上、あちこち探しました。色白の女が弟を連れて行ってしまいました。兄弟たちは心を痛め、「アイー、お父さんは弟を連れて行くなら注意するようにと言っていたのに。連れ帰るまで、いなくならないようにしっかり見ていろと言っていたのに」。兄弟たちはとても怖くなりました。

兄弟たちが帰ると、父親は「弟はどこだ?」と聞きました。一人の息子が「お父さん、寝ている間にいなくなったので、僕たちだけ帰ってきました。どこにもいませんでした」と言うと、父親は「怒って」弓矢を取って射とうとしました。「いなくなっただと! 息子を連れ戻せ! 探しに行け!」と言われて、兄弟たちは弟を探しに出かけました。カヌーで川を下り、一軒の家を見つけました。「男の子がここに来ましたか? 男の子と女を見ましたか?」「ああ、[見てはいないが] 空から女と男の子が太鼓を叩きながら行く音を聞いた」「そうですか(エー)」「この家に泊まって、明日川を下りなさい」と言われました。さらに川を下り、別の家で同じことを尋ねると同じ答えが返ってきて、泊まって、さらに下り、同じことが何度も繰り返されました。さらにどんどん下っていくと滝があり、通り過ぎてさらに下っていくと、小さな家を見つけました。家の中に老女が一人いました。「どうしたの? 子供たちよ、どのようにしてきたの?」「弟がこれこれがいなくなったので、ここに来たのではないかと探しに来たのです。川上の人たちに尋ねて、ここまで来たのです。弟を見ませんでしたか」と尋ねて、家の中に入りました。「ああ。川下で子供を連れた女を見た。空から太鼓を叩いて川下へ行った」「おお、それは弟だ。女が連れて行ったのはここですね。では探しに行きます」「ああ、だが、この先には誰も行ったことがない。ここは最後の地だ。この先には誰も住んでいない。これ以上川を下れない。誰もカヌーを漕いでいくことはできないよ」「そんな(エー)。いいえ、私たちは川下に行きます。いなくなった弟を探しに来たのですから」「いいや、川下には絶対行けないよ。人が住んでいるのはここまでだよ」「そうかもしれませんが。でも、父が弟を連れて帰れと言ったので、そうしなくてはなりません。探しに行きます。誰が連れて行ったのか、何が起こったのか見つけに行きます」と言って、老女の家に泊まって、翌日さらにカヌーでどんどん下って行くと、夕方、ワレヤの木で作ったカヌーがゆらゆら(ケボケボ)しているのを見つけました。「カヌーだぞ。お前かい?」と言いながら近づいてみると、誰もいませんでした。石が川をふさいでいるところにカヌーが止めてありました。誰かがカヌーを置いて歩いて行った足跡があったので、兄弟たちはその足跡をたどり、山を登っていくと、向こうの山の上に家が見えました。どんどん登り、下り、もう一つの山を越え、やがて暗くなりましたが、さらにどんどん登っていくと、すてきなところに着きました。色白な男が家から竹(中の料理を食べ終わった竹)を捨てに下りてきました。「誰か子供なのか、フクロネズミなのか、何か音がしたぞ」と言って、下りてきました。「ここが女の家だ」と兄弟たちは家にいくと、「おまえたちは何だ?」と色白な男が尋ねました。「我々が弟を祭に連れて行ったら、いなくなりました。女が連れて行ったので、探しに来ました」と話すと、男は「女が山の下に住んでいる。あんたたちの弟もそこだろう。私は女が男の子を連れて行くのを何度も見た。私の家に泊まって、女の家を見に行くといい」と言いました。「おお、そこです。我々の弟を連れて行ったのはそこです」と兄弟が言うと、「色白の大女が男の子を連れてきて暮らしている」と言いました。そして、男は料理して食べ物をくれ、タバコをくれました。食べ終わると、二本の竹を柵から下ろして割り、中からヒクイドリの肉を出して、それを兄弟たちにくれました。それも食べ終わり、いろいろ話をしました。話も終わり寝ようとしたとき、男は「弟を連れて帰るつもりか」と言いました。「そうです。弟を連れ帰りたいと思ってやって来ました。父は末っ子を大事にしていって、私たちが弟を祭につれて行って弟がいなくなったので、とても怒りました。弟を連れ帰るように言ったので、われわれは探しに来ました」「そうか。もう寝なさい。明日、二人が行った道を教えてあげよう。だけど、あなた達だけでは連れ戻すことはできない。連れ帰る道がないのだ。ここは人が住む最後の地だ。女が住むところへ人

は行けない。誰も女が住んでいるところへ行ったらいけない」。

翌朝、待つように言って、男はどこかへ出かけました。そして、たくさんの鳥の羽を持ち帰り、兄弟たち一人一人にくれました。「木がない[見晴らしのいい]ところがあるから、そこへ行こう」と言って、下りていきました。そこから下をじっと見ると、なんと(エーイ)、弟と女がいる家が見えるではありませんか。色白の女が弟に「サゴヤシを切りに行きなさい。あなた(夫への呼称)、サゴヤシを切りに行って!」とっていました。そして、弟がサゴヤシを切りに上って行って、ドーン(タイー)という切り倒す音が聞こえました。それから弟は家に帰り、石斧をもって新しい菜園に下って行きました。菜園でテガラヤシシヤアギブの太木を切り始めました。どんどん切っていきました。女はサゴデンブンを作りに上って行きました。兄弟たちが見ていると、弟はどんどん木を切り、口笛を吹きながら、何か考え事をしていました。女はサゴヤシを砕いていました。弟は口笛を吹いて、物思いにふけり、寂しそうでした。男が言いました。「弟は父親や兄弟のことを思って暮らしている。ここから弟がいる所までには崖があり、歩いて行くことはできない。空を飛びなさい」。もらったサイチョウの羽を体につけて飛んでみると、サイチョウのようにうまく飛ぶことができました。パタパタ(ハハ)と飛べました。男は一番上の兄に、弟の分の羽を渡しました。色白の男は言いました。「女がいなかったら、弟が切った木に降りなさい。弟に羽を結びなさい。そして、私の家に戻って来てはいけません。まっすぐお父さんの家に帰りなさい」。「ありがとうございます」と言って、兄弟たちはパタパタと飛んでいき、弟が切ったシシの木の木の上に降りました。弟はサイチョウを見て、「ワー(エー)、サイチョウだ。食べるために獲ろう」と考え、鳥をじっと見ながら歌を歌いました。歌の最後に父親と兄弟たちの名前(彼らのことを歌った歌)を歌いました。兄弟たちは歌を聞いて胸がしめつけられました。シシの木の上からサイチョウの群れがパタパタと下に降りて人間に変わりました。弟が見ると、なんと(アエー)、お兄さんたちがいるので嬉しくなりました。兄弟たちは弟の体に羽をつけ、全員で飛び立ち、色白の男の家の上を通り過ぎて、川を上って、どんどん飛んでいきました。暗くなったので木の上で眠り、翌日さらにどんどん飛んで、とうとうお父さんの家に着きました。父親はサイチョウがパタパタ飛んでいるのを見て驚きました。家のそばにサイチョウは降り、人間の姿に変わりました。それは息子たちでした。兄弟たちは父親にいきさつを話しました。そして、連れ帰ったので弟の面倒を見るようにと父親に話しました。

数日後、夜父親が寝ていると、下からテーテーという音が聞こえました。末っ子と二人で寝ていたところの下からテーテーという音がしました。何だろうと探しましたが、何も見えませんでした。その音のするところに湯をかけても、テーテーという音は止まりません。地面に末っ子の服が脱いであり、男の子がいなかったので探しました。すると、家の下に大きなエガ(タロイモの一種)が生えていました。「そこを見ろ。私の息子はエガになってしまった!」。それを引き抜いて切ると、なんと(ウオー)、中にはサゴ幼虫(*kui basege* 主にサゴヤシにいる甲虫の幼虫)がいました。エガはサゴ幼虫に食べられていました。色白の女はサゴ幼虫でした。エガを食べるために、サゴ幼虫が女に化けてエガを連れて行ったのでした。

3-5 クスクスとカバレ鳥 話者：ソアニ

母親と男の子が二人で暮らしていました。母親は男の子に「おまえ、西へ行ったらいけないよ。北や南に犬を連れて狩に行ってもいいが、西はダメだよ。イ(禁忌の地)があるからね」と言いました。「はい」と言って、男の子は犬を連れて狩に北や南へ行きましたが、西へ行くことなく暮らしていました。

ある日、母親がサゴデンブンを採りに行った後、少年は母親が行ってはいけないと言った西へと犬を連れて出かけていきました。西へどんどん行き、山を越えてさらに進み、四匹の犬を連れて西へ西へと山を登って行きました。日暮れに、犬が吠えながら興奮して山を駆け下りて行きました。男の子は弓と槍を持ち、下を見ると、大きな牙のあるブタに犬が立ち向かっていました。男の子は槍を射ちました。この辺だろうと探すと、ブタがごろがっていました。体の片側に槍がささっていて、オヤッ(エー)、なんと別の四匹の犬が現れました。男の子の

犬が四匹、別の犬が四匹現れました。男の子が射った槍がブタの片側に、誰か別の男の槍がもう一本反対側に刺さっていました。こわごわと見ると、見知らぬ男が現れました。少年は「お兄さん（親しみを込めた呼称）、犬と狩にきました。このブタを犬が追いつめて私が槍で射ちました。そこにあなたが現れたのです」と話すと、男は「エー、このブタは私の犬が追いつめて射ったのだが、おまえも射ったのだね」と言いました。少年が別れを告げると、「弟よ、何も心配するな」と男は言って、二人は握手して、会えたことを喜びました。ブタを半分に切り分けて、男は「こちらをあなたが取りなさい。今晚だけ私の家へ泊りに来ませんか」と言いました。少年は「いいえ」と断りましたが、男は「明日帰ることにして、一晩だけ泊りに来なさい」と言うので、「わかりました。そうしましょう」と少年は言いました。お母さんが一人になるので、少年は犬に「おまえは帰れ。お母さんのところに戻れ。私はこの人の家に泊まって、明日帰る」と言いました。犬は話を伝えに帰りました。そして二人はどんどん歩いて行きました。山を登り、下り、西へ西へと歩き、歩き・・・暗くなり、西を見ると、人の足跡がたくさんある小道につきました。道はぬかるんでいました。「ああ、お母さんが西へ行っちゃいけないと言ったのに、それを破ったので私は死ぬのだろう」と少年は考えながら西へと歩いて行きました。村がありました。とても大きな村でした。〔料理をする〕煙が上がり、ある者はクスクスを、ある者はヒクイドリを、ある者はフクロネズミを捕まえてきていて、たくさんの獲物がありました。犬を連れた少年が現れると、「オヤッ（エー）、見知らぬ少年が来た」と男たちは言いました。男は少年に「私の家はここだ。ここに座りなさい」と言ってマットを置いてくれました。タバコをくれ、クスクス、ヒクイドリ、パンノキの実をくれました。マットをしいて「ここに寝なさい」と言いました。男たちも、ある者は焼いたサゴを、ある者はクスクスを、ある者はヘビなどを持ってきてくれました（歓迎してくれました）。男は妻に「サゴを持ってきてくれ!」と呼びかけました。「はい」と答えがあったものの来ないので、「おまえ、サゴを持ってきてくれ!」ともう一度言いました。妻は「あなた一、あなたの妹にサゴを持っていくように言いました」と言い、少年が後ろを見ると、若い娘がサゴを持って現れました。娘は少年がいたので驚きましたが、少年と結婚したいと思いました（一目ぼれしました）。少年はサゴと肉を食べ、寝ました。

翌朝、妻が「あなた一、ここにいたブタがいない。昨晚ここにいたのに」と言いました。男の妹は「ブタを網袋に入れて」出かけました。少年について行こうと考えて、少年が来る道の途中で待っていました。男は少年を帰り道の途中まで送って行って、「弟よ、ここから帰りなさい。私の妹がいたら、二人で行きなさい。妹を連れて行きなさい」と言いました。少年は昨日連れてこられた道をどんどん戻って行きました。途中で何か物音がするのが聞こえました。下の方で木が揺れていました。見ると、アラッ（エケー）、少女が隠れていました。少年は嬉しくて「アア（エー）、私の妻がここにいる」と言いました。少年は少女が現れたので喜んで、結婚するために少女を連れて帰りました。昨日ブタを射った場所を通り、夕方家に着きました。母親は待っていました。母親は少年が妻を連れてきたのを見て「怒って」こう言いました。「絶対に妻を連れてきてはいけない（結婚してはいけない）」。少年だけ家に入り、少女は「おまえは入ってはいけない」と言われ、家の床下（地面）で寝ました。お母さんに家に入ってはいけない、家の下に寝るようにと言われて「結婚できずに」、少女は床下に寝て暮らし、ブタの世話をしていました。いつまでも床下に寝てはいられないと、自分で家を作り、その家で一人で暮らしました。

そうして日が過ぎ、少女が育てたブタがとて大きくなり「ブタを殺すことにし」ました。「彼は私のことを好きではないのだわ」と少女は考え、薪を集めて石を焼き、ブタを殺して石蒸し焼きにして、骨を取って肉だけを網袋に詰め込み、サゴを焼いたものを別の網袋に詰め込み、青菜などあらゆるものをもう一つの網袋に詰め込みました。「妻になるために来たのに、妻になれないなら帰る」と言って少女は家を出ました。少年は少女が出ていくのを見て、後をついて行きました。少女は「あなたが私の家に来ると思って待っていたのに、あなたは来ませんでした（結婚しようとしませんでした）。私は帰ります。ついて来てはいけません。私は行きます」と言いました。少年は「オオ（イー）、私の妻よ、私も行くよ」と後をついて行き、やがて暗くなりました。少女

は「あなたは、川下に寝なさい。私はここに寝ます。ここに来ないでください」と言いました。そして「ブタを少しここに置きます。サゴを1本ここに置きます。これを食べてください」と言いました。そのようにして、西へ西へと毎日歩き続けました。ある日、少女が言いました。「今日、ブタがなくなりました。サゴもなくなってしまいました。今日は、樹皮布（女は頭に被る）しかないの、これを食べます。樹皮布があるので、食べてください」と言いました。それで、少年は樹皮布を食べて寝ました。次の日の夕方、少女は「今日は、腰みのを食べます。あなたも腰みのを食べなさい」と言いました。少年は腰みのを食べました。腰みのを食べ食べ、進んで行きましたが、「今日は、何も食べるものがありません。髪を食べてください。私も髪を食べます。あなたも髪を食べてください」と少女は言いました。少年は自分の髪を食べました。そして、髪を食べ食べ、西へ西へとどんどん歩いて行きました。服はすべて食べつくしました。髪もすべて食べつくしました。「すべて食べつくしてしまいました。今日は私は土を食べます。あなたも土を食べてください」。それで、少年は土を食べ食べ、さらに西へと進んでいきましたが、ついに「何もかも食べられるものはなくなってしまいました」と少女が言いました。そして山に登って行きました。少年は少女の手を取ろうと（結婚を申し込もうと）追って行きましたが、少女はどんどん山へ登って行きました。穴や岩だらけの険しいところに来ました。少年は少女の手を取ると、少女は木に登って行きました。「オオ（アイー）、私の妻よ、行くな!」と言って見ると、少女は赤いクスクス（*Sese Kanamu*）に変身していました。少年は「オオ（アイー）、私の妻よ!」と言って、泣きながらカバレ鳥（*Ya Kabare* 黒い羽の内側が赤い鳥）になりました。少年は結婚しようとしたましたが、娘はクスクスの女なので、結婚できませんでした。クスクスは山に登っていき、今もそこに暮らしています。クスクスがいる所にカバレ鳥は飛んでいます。

3-6 バセゲ・サゴヤシとコウモリ 話者：ルーベン

あるところに、老女と少年が住んでいました。ある日、少年は小川へ出かけ、魚を探しながら上流へと歩いて行きました。すると、何かが流れてくるので見ると、捨てられたブタの内臓が上流から流れてきました。川上へと注意しながら歩いていくと、一人の大男がいました。男は自分の頭を取って地面に置いて、石蒸し焼きにして切ったブタの肉を首の下に入れていました。少年はブタの足を盗んで逃げ帰りました。少年はお母さんが待っている家に帰り、二人で食べました。男はブタの肉をすべて体に入れ終ると、再び頭をつけて、家へ帰って行きました。数日後、少年はまた小川へ出かけました。何かが流れてくるので見ると、ヒクイドリの内臓でした。少年は再び川上へ慎重に歩いて行くと、男がヒクイドリを石蒸し焼きにして置き、頭を外して、体の中にヒクイドリの肉を全部入れていました。少年はヒクイドリの足を盗んで家へ逃げ帰りました。男はヒクイドリをすべて体に入れ終わると、頭を戻して家へ帰りました。少年はヒクイドリの足を持ち帰り、お母さんと二人で食べ、母親は「お前、どのようにして、ヒクイドリなどを持ち帰れたの?」と聞きました。「川の上流へ行ったら、知らない男の人がくれたんだ」と少年は答えました。そのようなことが何度も何度も起こりました。そのようにして月日が流れました。

ある日、少年はまた魚を探しながら小川の上流へと歩いて行くと、ブタの内臓が流れてきたので、慎重に上流へ上って行きました。男がブタを石蒸し焼きにして置いてあり、頭を地面に置いて、肉を体に詰めようとしていました。少年はブタの足を盗もうとしたましたが、男が少年の手を捕まえました。「誰かを捕まえたぞ」と少年の手をしっかりと掴んで、もう一方の手で自分の頭を探しくつつけると、少年がいたので、「おまえはどうやって来たんだ?」と聞きましたが、少年は何も答えませんでした。大男は少年を家に連れて行きました。そして、少年の手足を紐で縛り、何枚も重ねた網袋に少年を入れて、それを持って出かけました。高い山に登り、滝のあるところに着き、滝の一番上まで登って行きました。頂上にワユバの木が生えていました。木に登って、木のてっぺんに少年を入れた袋を吊るしました。男は木から降りてこう言いました。「おまえはそこで死ぬ! いつも俺のブ

タなどを盗んでいたからな。そこで死ぬがいい!」。そして、男は家へ帰っていきました。

少年は置いていかれて、食べることができないのでお腹がすきましたが、ワユマの木のでっぺんに吊るされたまま時間が過ぎていきました。一番外側の網袋は破れて落ちました。やがて2番目の袋も破れて落ちました。いろいろな種類のクスクスが夜やって来ました。いろいろな種類の鳥たちもやって来ました。少年は「クスクスよ、サイチョウよ、ヤマネズミよ、コウモリよ、鳥よ、僕を連れて行って!」とやってくるすべての動物に呼びかけました。「クスクスよ、僕を連れて行っておくれ!」「いいや、おまえは私を食べるからだめだ」。サイチョウに言いました。「僕を連れて行って!」「いいや、おまえは私を食べるからだめだ」。コウモリが来たので「コウモリよ、僕を連れて行って!」「いいや、私を食べるから嫌だ」と言われ、そうこうするうちに、何枚も網袋が破れて、最後の一枚を残して、袋は全部破れてしまいました。最後の一枚で少年は吊るされていました。少年は悲しくなって「僕は今日死ぬんだ。滝の下に落ちて死ぬんだろう」。少年は泣き続けました。夜になって、大きなコウモリがやって来ました。「オオ（アエー）、コウモリよ、僕を連れて行って!僕は今日死んでしまうだろう。夜中に落ちて死んでしまう。どうか連れて行って!」と泣きました。コウモリは去っていましたが、ノケーと鳴いて戻って来て、網袋を掴んで家へ連れて行ってくれました。

老女は息子がなくなったので、泣いて暮らしていました。朝、コウモリがベランダに少年が入った袋を置きました。「アア（エー）、誰が私の息子連れてきてくれたの?」。少年がベランダに置かれたので「おまえを誰が連れてきたの?」と聞くと、「お母さん、コウモリが連れてきてくれたんだ。僕はブタやヒクイドリを盗ってきて食べたので、[持ち主の]男が怒って僕を袋に入れてワユバの木のでっぺんに吊るしたんだ。もう死ぬというところだったけど、コウモリが僕を連れてきて家に置いてくれたんだ」と話しました。「よかったこと」と老女は喜びました。コウモリは「私が食べるのは、バナナ、パンノキの実、木の実などです。でも、ブタやサゴデンプンやそういうものは食べません。ですから、バナナ、実のなる木、パンノキを植えてください。二人が菜園を作るなら、パンノキ、バナナ、マンゴをたくさん植えてください。ここに来たらそれを食べます。もし、いつかワユバの木に吊るした男を殺そうと思うなら、熟したバナナやマンゴなどを準備して、われわれに来说いなさい。そうすれば、われわれは来ます」と言いました。「わかった」と少年は答えました。

少年は母親と菜園を作り、バナナ、マンゴ、パンノキなどコウモリが食べるものをすべて植え、準備をして、コウモリに「いつでも来てください」と言うと、たくさんのコウモリが人間の姿に変わってやって来ました。そして、バナナ、マンゴ、パンノキの実を食べて寝て、翌朝戦いに出かけました。男を殺すために小川を上っていきました。男がいるところへ着き、見ると、男は頭を取って地面に置き、ブタの肉を食べていました。そこへ敵がやってきて、男を殺そうとしたので、男はバセゲ・サゴヤシ (*kui basege*) に変身しました。大きなバセゲがそこに生えています。男はバセゲに変わったので殺せませんでした。やってきた男たちはコウモリ (*karuwae*) の姿に戻り、少年と老女の二人もコウモリに変わり、皆で飛んでいきました。男を殺そうとしましたが、男はバセゲ・サゴヤシに変わってしまいました。

4. 物語の解釈

伝承の中で、動植物と人間はしばしば互いの姿に変身する。「3-1」は、人喰い男がバッタに変身していて、男の子がバッタを弓矢で射ると（小さい子は昆虫など小動物を狩る）、バッタは男に変わり、老女と男の子を殺しに来るが、二人はのみに変身して逃げるといふ物語である。「3-2」は、忍び込んでいつも悪さをしていた男が見つけられて殺されそうになったが、オオトカゲに変身して逃げる話だが、どこかユーモラスな話で、オオトカゲの由来の物語である。この2つの物語は、殺されそうになった人間が逃げるために動物に変身したことによって、その動物が誕生したという発祥の物語だが、「3-3」はやや異なる。男が妻に秘密の行動を見られて羽アリに変身するが、男の不可思議な行動によって羽アリが男に変身して暮らしていたことが暗示されている。

「3-4」も動植物が人間に姿を変えて現れる物語である。上記の物語と違うのは、この物語では動物（サゴ幼虫）が人間に化身して現れるというだけでなく、それが異界に住むものであることが明示されていることである。フォイでは、川底、天上にはこの世と同じような世界があり、霊が人間や動植物に姿を変えてこの世と同じように暮らしていると信じられている。白い女に連れ去られた弟を探しに兄たちは川下へと行き、「人間が住む最後の場所」にたどり着くが、そこを超えて異界へと足を踏み入れる。そこで出会った白い男（霊的存在）の助けを借りて、白い女（サゴ幼虫の化身）と夫婦となって暮らしていた弟を見つけ出す。幼虫は白色なので女も白かったのであるが、「白い人間」というのは普通の人間ではなく霊的存在だと人々に認識されている⁽⁵⁾。鳥の羽を使って飛んでいき、弟を連れ戻すが、最後に弟はタロイモに変身してしまう。弟はタロイモだったことが最後に明らかになる。話の冒頭で、弟がいつもベランダで寝ていると語られるが、これはふつうではない。弟と一緒にベランダで寝ていた父親は何かを知っていたと思われる。女に変身したサゴ幼虫は、弟がタロイモであることを知っていたために自分の住む異界へと連れていき、夫婦として暮らしていた。サゴ幼虫は、甲虫が主にサゴヤシに卵を産みつけてその中で成長する幼虫であるが、タロイモの中にもいることもある。

「3-5」は、男の子が禁忌の地イへ行って、出会った男に連れられて異界に入っていく。男の妹と相思相愛になり連れ帰るが、母親が結婚を許さない。母親は娘が人間ではないことを知っていたのである。娘は結婚をあきらめて自分の世界へ戻ろうとするが、後をついて来た男の子と山へ登っていき、クスクスとカバレ鳥に変身する。フォイの伝承は、異界から現れた女と結婚して子供も生まれるが、夫婦喧嘩をして、妻が異界へ帰ってしまうという結末のことが多いが、この伝承では異界の女と人間の男は結婚できずに悲しみのうちに動物に変身して、現在もそこにいと語られる。クスクスとカバレ鳥が山奥に住んでいる由来を説明する伝承である。

「3-6」は、男の子が怪人と出会い、何度も怪人の獲物を盗んでくるが、ついに怪人に捕まって滝の上に吊るされる。何重にも重ねられた網袋の中に入れられて滝の脇の木の上に吊るされるが、外側から一枚、また一枚と破れて、最後の網袋が破れる寸前にコウモリに助けられる。最後にコウモリたちが人間に姿を変えて、男の子と一緒に怪人を殺しに行くが、怪人はサゴヤシに変身してしまう。男の子と母親もコウモリに変身する。これも「3-5」と同様に、超自然的存在が変身してサゴヤシになって今も生えているという物語である。

5. おわりに

フォイでは狩猟が重要な生業活動である。人々は行動するときは常に周りの気配に五感を働かせている。人々は動物たちの生態や行動を熟知している。ブッシュを歩いている時も川をカヌーで漕いでいる時も、獲物の姿を素早く見つけることができる。筆者には全く聞こえない音や気配に反応し、オオトカゲやヘビをしとめる場に何度も遭遇した。あたかも、動物たちと無言の対話とかけひきをしているかのようである。実際に動物と対話している場面に出くわしたこともある。ある時ブッシュを一緒に歩いていた青年が、鳥の鳴き声をまねて口笛を吹くと、それに応じて鳥が鳴き始めたのである。鳥と対話できることに、とても驚嘆した。また、人々はブッシュに放し飼いにしているブタを呼び出すときも、独特の声で呼びかける。半野生化しているため呼び出すのは容易ではないが、ブッシュをさまようブタに聞こえるように独特の声で呼びかける。動物とコミュニケーションをとったり、常に接しながら暮らす生活の中で生み出されたのが、本論で取り上げた伝承である。

イにいた霊的存在が人間界にやってきて、クスクスに変身して今もそこにいと伝えられる。あるいはサゴヤシは超自然的怪人が変身したものだと語られる。こうした物語は架空のものではなく、その由来を説明するものとして捉えられている。日常接するさまざまな動植物には霊が宿っていると信じられており、霊的存在は決して特別なものではない。霊的存在はふだんは目に見えないものの、時として実際に遭遇することがあると信じられている。ある日、家の中にヘビが入ってきたのを見て、「亡くなった母が帰ってきた」と男性が語ってくれたこともそれを物語っている。

しかし、霊的存在は時に人を殺そうとしたり、危害を加えることもある。長老が語ってくれた話では、ある時カヌーがいくら漕いでも全く動かなくなり、霊によって転覆させられそうになったという。特に、イにいるヘビなどを見ると、病気になったり、死に至ることもあると恐れられている。イとは、この世と異界との境界であると解釈できる。同様に、川下、西の方角も危険な場所として避けられるが、狩猟などでそうした場所に足を踏み入れてしまうこともある。人々にとって異界にいる霊的存在は恐れられると同時に、完全に避けることはできないものである。霊的存在は人間と隔絶したものではない。

フォイの世界観では、この世と異界は明確に分けられるものではなく、相互に境界を越境しうるものである。また、人間と霊的存在も、結婚によって時には親和的に交わり、時には殺したり殺されたりと敵対しながら、交流し続けているのである。

謝辞

本論のデータは、1992年から2014年にかけて断続的に実施したフィールドワークによって収集されたものである。1992年から94年までの調査は大和銀行アジア・オセアニア財団（現りそなアジア・オセアニア財団）の研究助成を受け、1996年の調査はトヨタ財団の研究助成を受けることによって可能となった。2014年の調査は科学研究費補助金（課題番号：25884017）を受けて行われた。各機関の支援に感謝申し上げたい。

調査期間中、筆者の日常生活から調査まで、全面的にサポートしてくれた低地フォイの方々には紙面を借りて心からお礼を申し上げる。テープおこしは多くの方々に長時間にわたり助けていただいた。またアシスタントを引き受けてくれた故ノーマンとフニビには、翻訳に際して大変お世話になった。すべての方々に、この場を借りて心から感謝申し上げたい。

註

- (1) 男女の空間が区分されているのは、女性がケガレしているとする観念と関係している。女性のケガレについては、植谷（1999）参照のこと。
- (2) 歌を伴う祭礼については植谷（1997、2004）において論じた。
- (3) ただし、会話文では誰が誰に語ったのかは省略されることが多く、わかりにくい場合には補足したが、これは〔 〕に入れていない。
- (4) 神話や伝承には必ずしも題名があるわけではなく、語り手が語ったものもあれば、筆者が付けたものもある。
- (5) ニュージーニア人が初めて白人に会ったとき、白い霊がやってきたと思って怖かったという話が広く流布している。植谷（2000）参照。

参考文献

- 植谷智子「パプアニューギニア・フォイ族の歌」『国立音楽大学研究紀要』第31集、1997年、101-114頁。
- 植谷智子「ジェンダーとコスモロジー」『社会科学ジャーナル』（国際基督教大学社会科学研究所）40号、1999年、111-138頁。
- 植谷智子「白い霊がやって来たーパプアニューギニアにおける接触史ー」『国立民族学博物館研究報告』別冊21号、2000年、109-129頁。
- 植谷智子「歌・出来事・記憶ーパプアニューギニア、フォイの歌、その2」『国立音楽大学研究紀要』第38集、2004年、107-118頁。
- 植谷智子「語り継がれるものーパプアニューギニア、フォイの神話・伝承」『国立音楽大学研究紀要』第47集、2013年、77-86頁。
- 植谷智子「語り継がれるもの その2～その7」『国立音楽大学研究紀要』第48集～52集、54集、2014年～2018年、2020年。
- Murray Rule (1993) *The Culture and Language of the Foe : The People of Lake kutubu, Southern Highlands province, Papua New Guinea*. Port Moresby : CHEVRON NIUGINI. Pty.Ltd.